

堀内 隆行 著

ネルソン・マンデラ

リアリスト

——分断を超える現実主義者

紹介者 小川 正樹



岩波書店

2021年7月刊

新書判

194ページ

本体 800円

目次

はじめに——映画や本に描かれたマンデラ

略語一覧

第1章 首長の家に生まれて

第2章 プラグマティストという天性

第3章 非暴力主義という武器

第4章 民族の槍

第5章 「誰もが彼に影響された」

第6章 老獺な「聖人」

終章

読書案内

あとがき

「わたしは天子ではない」と自分自身で語るように、ネルソン・マンデラは天使でも聖人でもない。しかし、私たちは映画や自伝から勝手にマンデラのイメージをつくり上げてしまっている。現実には、マンデラは理想主義者でも平和主義者でもなく、現実主義者として表現しようがない、というのが著者の思いである。27年間にもおよぶ服役や南アフリカ共和国の大統領就任、ラグビーW杯での民族融和の象徴的存在など、これまでマンデラは一貫した理念にもとづいた理想的な指導者であるとみなされてきた。

著者はこうした見方を単純に肯定も否定もするわけではなく、歴史学者としてマンデラを評価することを試みた。評価の際には、時代背景の理解が欠かせないため、著者は丁寧にマンデラの人生の歩みを、大英帝国の支配とその変容、東西冷戦構造の構築と崩壊の歴史のなかで描き出そうとした。歴史上の有名な人物の評価は、決してかわらないものではなく、インド独立の英雄であるガンディーでさえも、その評価には修正がせまられている。

著者はマンデラの人生を6つの章に区切って解説しているが、その内容には驚かされるものが多い。自分がいかにマンデラという人物を一面的に、そして自分が理解したいように理解していたのか、という現実を突きつけられる。最後に掲載されている読書案内は、より詳しく知りたい読者には大変便利である。ただこの新書一冊だけでも、マンデラに対する見方は大きな修正をせまられ、歴史上の人物を評価することの難しさを痛感する。

中学や高校の授業でマンデラの説明に多くの時間を費やすことは現実には困難であるが、歴史のできごとや歴史上の偉人の評価については、多くの評価軸と柔軟さ、その時代の特徴を可能な限り反映し、先入観を排除して事実をありのままに受け入れること、が重要であるということを改めて認識させられた。

最後に、マンデラの偉大さとは何か？ それはこの新書を読んで各自で考えていただきたいが、筆者が感じたことは「ゴールを決して見失わなかったこと」につきる。人種差別を克服して人種間の和解を実現するために、主義や思想、信条にとらわれることなく、戦略の軌道修正もいとわず、現実主義者としてその時々を下す最適な解決策をどこまでも模索したからである。「偉人」を作品としてではなく、現実に生きた一人の人間として描く、という歴史学者の本気が伝わってくる一冊である。

(おがわ・まさき／函館ラ・サール中学校高等学校教頭)

加藤 玄 著

世界史リブレット人32

ジャンヌ・ダルクと百年戦争

——時空をこえて語り継がれる乙女

紹介者 美那川 雄一



山川出版社

2022年4月刊

A5変形判

112ページ

本体800円

目次

二十一世紀にジャンヌ・ダルクの伝記を書くこと

- ①ジャンヌ・ダルク登場以前の百年戦争
- ②ジャンヌの登場とオルレアン解放
- ③ジャンヌの捕縛と異端裁判
- ④百年戦争の終結と異端判決の破棄
- ⑤ジャンヌ・ダルクの神話化

本書は、ジャンヌ・ダルクの指輪から話が始まる。2016年にジャンヌの遺品とされる銀の指輪がロンドンのオークションに出品された。指輪は、裁判時のジャンヌの証言に伝わるように、5つの十字とイエスとマリアを示す銘が彫られていた。ジャンヌの指輪を落札したのは、ヴァンデ県の歴史テーマパークを運営する財団であった。落札金額は30万ポンド。財団は、「指輪がフランスに帰ってきた」としてイベントを盛大にもよおし、ジャンヌの指輪は、テーマパークの集客に大きな役割を果たしたという。ちなみに、テーマパークの設立者は極右政党の党首であった。

一方で歴史学者たちにより設立されたルーアンの「ジャンヌ・ダルク歴史館」は、その信憑性からオークションには参加しなかった。歴史学者たちは、ジャンヌの政治的利用を批判し、実証主義的歴史学により彼女の姿を描こうとしてきた。しかし、ジャンヌ・ダルクに関する記録は様々な立場から描かれて内容的に矛盾する史料もあり、当初からすでに神話化が始まっていた。そのため「真のジャンヌ・ダルク」の解明ではなく、ジャンヌを15世紀という歴史的文脈に位置づけて考察し、同時代人が彼女にもった印象を再構成すること、そして彼女のイメージを形成した当時の人々の「心性」に焦点を当てる研究が進んでいる。著者もこの研究的視座に立ち、ジャンヌ・ダルクに関する当時の人々の証言記録から、彼女の何がどのように語られていったのかについて注目しながら伝記を叙述している。

近年の大学入学共通テストでは、史料の読解を求める問題が出題され、授業でも資料を用いた歴史学習が提唱されている。本書は、ジャンヌにまつわる証言や預言などの史料を時系列で追っていくことで同時代人々もったジャンヌのイメージを再構成しようと試みており、複数の資料からジャンヌ・ダルク像がいかに形成されていったのかを探究することができる。ジャンヌという1人の少女に対するイメージを通じて、15世紀の仏英社会を学ぶ絶好の教材になるだろう。

ジャンヌ・ダルクの人生は20年に満たなかったが、彼女への関心はすでに16世紀から始まっており、生きていた時間の何倍もの時間を人々の記憶のなかで、実に様々な姿で生き続けている。そして、現在の日本においては、ジャンヌ・ダルクはサブカルチャーの文脈のなかでも多様な役割を与えられ、これからも活躍し続けるだろう。

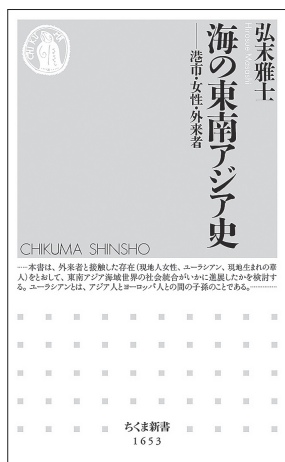
(みながわ・ゆういち／静岡県立小山高等学校教諭)

弘末 雅士 著

海の東南アジア史

——港市・女性・外来者

紹介者 角田 展子



筑摩書房

2022年5月刊

新書判

288ページ

本体880円

目次

- 第1章 近世東南アジアの港市——多様なネットワーク
- 第2章 外来者と現地人女性
- 第3章 近世後期の東南アジア社会——現地人首長とヨーロッパ勢力
- 第4章 植民地支配の拡大と外来系住民
- 第5章 新たな内と外の構築と国民国家

「世界史探究」の教科の特色の1つに、「諸地域の交流」や「諸地域相互のつながり」の重視があげられる。本書は、そのような観点で教材化をはかるうえで、新しい視座を得られる一冊といえよう。新書ながら写真や地図が豊富に掲載されており、とくに港市の街区地図などは活用できそうだと付箋を貼りつつ読み進めた。

従来のように「前近代と近代」「内と外」にわけて東南アジアの歴史を考えるのではなく、それぞれを連関させて理解するのが、本書の目的であり、その際、外来者と接触しながら生きた現地の人々（とくに女性）に焦点を当てているのが特徴的である。

港市において、外来者が現地の女性と関係をもつ事例は、古来よりどの地域でも知られているが、ともすれば、そのような女性は社会からも軽視されがちで、歴史学的に大きく取り上げられてきたとは言いがたい。

本書では、まず、近世東南アジアでの商業活動における女性が担った役割について、同時代の資料を豊富に紹介しつつ、検討が加えられていく。たとえば、13世紀のカンボジアを訪れた中国商人の記録にも、15世紀の鄭和遠征隊の記録にも、18世紀にアユタヤを訪れたイギリス人の記録にも、女性達が市場の取引において主導的役割を果たしていたことが詳細に記されている。彼女らは「ニャイ」という尊称で呼ばれた。外来商人が、現地の女性を妻としたのは、「ヨーロッパ人が交易を行おうとすると、地元の女性を娶り、彼女らを介さないと商業活動ができない」（18世紀のイギリス人の記録より）という側面が強かったのだろう。商業活動だけではない。18世紀末にバタヴィアに来た中国人商人は、風土病への対処方法から、金鉱脈発掘事業に至るまで、ニャイには逆らえないことを記している。本書に掲載されている図版のなかのニャイは、市場で外来商人と堂々と渡りあう女性として描かれている。

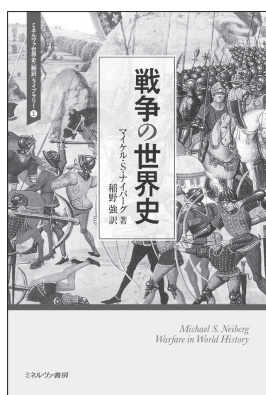
しかし、ニャイの地位は19世紀以降、急激に変化していった。東南アジアでのナショナリズムや社会主義思想の普及のなかで、ニャイは自立した女性ではなく、仕方なく「妾」とされた植民地支配の犠牲者とみなされたのだ。さらに、20世紀に進んだ脱植民地化と国民国家形成のなかで、ニャイは過去存在となっていった。

ニャイの事例は、社会には人と人をつなぐ媒介者の役割が重要であることを示している。ニャイの存在をふまえて、「媒介」「連関」などをキーワードに世界史を探究していきたい。（つのだ・ひろこ／東京都立青山高等学校教諭）

マイケル・S・ナイバーク 著
稲野 強 訳

戦争の世界史

紹介者 三森 朋恵



ミネルヴァ書房

2022年11月刊

四六判

228ページ

本体2,600円

目次

はじめに

謝辞

序章 1944年6月5日

第1章 古典時代——紀元500年まで

第2章 ポスト古典時代——紀元500～1450年

第3章 火器の出現——1450～1776年

第4章 ナショナリズムと産業主義

第5章 第一次世界大戦

第6章 第二次世界大戦

第7章 冷戦とその後

第8章 結論

訳者解説

科学技術の進歩が人の思考や価値観に影響を与える。またその逆もしかりだ。この双方向性は、これまで歴史上の様々な場面で示されてきた。本書も、個別の戦争を取り扱いながらこの関係性を映し出し、そのうえで戦争という現象やその変容についてとらえようとしている。本書で取り上げられている時間軸は古代から現代までと長い。しかし、目次をみるとわかるように、いずれの戦争についても「兵士」「武器」といった共通した小見出しが設けられている。そのため、読み進めながら自然と比較検討をおこなうことができ、各戦争の特色や、時代の移りかわりとともにかわっていく様子を無理なく理解できる構成となっている。訳者による丁寧な解説も、読後の論点整理や知識補完の点で大いに助けとなる。

ポリス防衛と参政権の関連性や、火器の普及と騎士階級の没落というような、高校世界史の学習内容につながる具体も多く盛り込まれている。これら戦争と社会の相関について述べられているなかで、とくに興味をひかれたのが日本における火器の記述である。使用されたものの重要な手段とはみなされず、外国の影響力をおさえたという作用が働き主要な武器とならなかったという。また、敵から距離をとった攻撃をおこなう、投石機や槍、弓、弩などの飛び道具の使用について、民族や国によって考え方に違いがみられた点や宗教的権威の影響が見受けられた点も、冒頭の双方向性を感じ興味深かった。

そのほかアレクサンドロス大王やカエサル、カール・マルテルやピョートル大帝など、高校世界史でおなじみの人物も多く登場する。彼らの時代の戦争についてはもちろん、その記述を通じて、彼らがなぜ権力を握ることができたのかを具体的に読者に指し示している。また、ナポレオン時代の反省を経てプロイセンが軍事的成長をとげたという内容も、別個の学習として認識されていたもの同士をつなぐような、より深い理解に引き上げるものに思われた。

このように、高校生など世界史の初学者にとっても親しみやすく、また、より深い理解を得ようとする学習者の期待にもこたえるものである。教科書とあわせて読むことで、技術の発展と思想の双方向の影響を理解でき、同時にそれらが戦争の意味や位置づけ等々、様相の変化へつながっていることをとらえられるはずだ。

(みつもり・ともえ／秋田県立大館鳳鳴高等学校教諭)